

中学校歴史学習における地域教材活用の視点（Ⅱ） —小学校地域学習との連携を踏まえた伝統産業の教材化—

六本木 健志* 田丸 淳哉**

The Viewpoint of the Local Teaching Materials Utilization in the Junior High School History Learning (Ⅱ)

Takeshi ROPPONGI, Junya TAMARU

要旨 本研究は第Ⅰ報に続き、中学校の歴史学習に関して「地域史（地方史）」と「全体史（中央史）」という二項対立的な見方の克服を目的に、身近な地域を教材とした歴史学習の授業構想に関して一視点を提示するものである。第Ⅰ報と併せて個別性の追究から人間社会そのもののありようをとらえる視座を、生徒たちに養う授業開発を提示することを目的とする。直接的には、小学校社会科の地域学習の歴史的内容との関係性を踏まえて、中学校歴史的分野における身近な地域の歴史学習についての授業開発を目的とする。

キーワード：地域教材 歴史学習 伝統産業 中学校社会科 日本の近世

はじめに

本研究は第Ⅰ報に続き小学校社会科の地域学習の歴史的内容との関係性を踏まえて、中学校歴史的分野における身近な地域の歴史学習についての授業開発を目的とする¹⁾。第Ⅱ報となる本稿では、中学校社会・歴史的分野の単元「日本の近世」における「産業の発達」について、地域の歴史学習としての授業展開の視点と指導事例を提案する。具体的には、現在も各地域の伝統産業とされている江戸時代の特産物を教材として取り上げ、列島の一体化を考察する。そのなかで、近代国家の領域形成に至る「時代の大きな流れ」をとらえる授業開発を提案する。

具体的には、中学校社会歴史的分野の身近な地域の歴史学習および小学校社会の地域学習について、学習指導要領上での位置づけを明らかにし、その系

統性の上に中学校の身近な地域の歴史学習を位置づけ授業展開案を提案する。そのなかで個別具体的事象から社会全体のありようをとらえる歴史学習の視点を提示したい。

第Ⅰ報で取り上げた森本正巳の論証により、小学校社会の地域学習「開発単元」は、その時々々の国の国土開発方針が反映され、それは教師の指導面にも影響を及ぼし「国家のもつ教育への影響力（規制力）」の大きさがうかがえたとされた²⁾。

そこには、国家の政策方針そのものに振らされることで、時々に変化する方針を疑うことなく追従し、ややもすると「地域社会」「我が国（日本）」そのものへ盲目的に「誇りと愛情」を持つ態度へ至る危険性を有している。この問題を克服するには、国家を相対化してとらえる眼を児童生徒に養う必要がある。その一つとして、現代の国民国家の抱える課題、経済的な価値観を膨らませ過ぎたがゆえに生じている社会的ゆがみの克服へ向き合う眼を、児童生徒に育成することが求められる。

* ろっぽんぎ たけし 文教大学教育学部学校教育課程社会専修

** たまる じゅんや 文教大学教育学部非常勤講師

本研究では、こうした問題意識のもとで、第Ⅰ報においては、現在の国土景観の原型をたどらせるなかで、経済社会の形成の一端を探究させるものとし、それを権力側（国）の政策としてではなく、私たち自身の生活・生産活動の営みを起点として社会経済システムの形成において学習するための視点を提示した。これを受けて本稿（第Ⅱ報）では、地域に残る伝統産業（近世の特産）を教材として、生徒に人やモノの双方向の移動が列島全体を一体化させた過程を授業において検証させる。この列島上の生活圏を国民経済の前提とみることで、列島における近代国家（国民国家）の領域形成を経済面において考察させる。この学習過程を通して、国家（近代国家）を私たち自身の生産・生活の営みから相対化する眼を生徒に育成したいと考える。

I 新学習指導要領における身近な地域の歴史学習の扱い

i 中学校学習指導要領（歴史的分野）における位置づけ

歴史学習の意義は、尚古主義的な立場から過去の社会的事象に関する知識を身につけることではなく、今を生きる私たちが根なし草とならぬよう自らの足場を確かめ、明日をいかに切り拓いていくかという営みにある。この自らの足場を確かめる直接的な学びが身近な地域の歴史学習である。

平成29年告示の中学校学習指導要領「社会」でも、この点がより明確に示された。歴史的分野の内容の冒頭に、大項目A「歴史との対話」が設定され、「(1) 私たちと歴史」「(2) 身近な地域の歴史」の二つの中項目において、基本的な方法および歴史の見方・考え方といった中学校歴史学習の根本的枠組みが示されている。その主要な観点として、次のようなものがあげられる。

- ・現在の私たちとのつながりに関して歴史をとらえる。
 - ・地域に残る文化財や各種の諸資料を活用する。
 - ・生活や生活に根ざした伝統・文化に着目する。
 - ・地理的分野との連携、公民的分野との関連を踏まえる。
- 身近な地域は「歴史上の出来事を具体的な事物や

情報を通して理解することができるとともに、それを自らが生活する日常の空間的な広がりの中で実感的に捉えることができる学習の場」と位置づけられている³⁾。さらに自らの地域の歴史を、他地域と比較・関連させて、時代的な背景や地域的な環境のなかで捉えることで、現代の私たちとのつながりを考察・表現することが求められている。そこでは、地域に残る文化財や諸資料を活用し、多面的・多角的に考察を加え、現代に生きる自身の視点から歴史を問いかけることが求められている。その最終的なねらいは、教材として地域の具体的歴史事象を用いることで、学習に対する興味関心、「我が国」の歴史や伝統・文化への理解を促すこととされている。

また、身近な地域の歴史学習は、学習指導要領において、原始・古代・中世・近世・近現代の時代の流れにおいて計画的に扱うように指示されている。なかでも大項目（3）近世の日本「(ウ) 産業の発達と町人文化」の単元で、積極的に取り上げて展開することが求められている⁴⁾。

この単元における具体的な学習内容は、江戸時代前期における諸産業の発達、特産物生産の成立、交通の発達、都市の発達、幕政の安定（徳川綱吉の政治）、元禄文化、地域の生活文化（年中行事など）である。そこでは「地域の特徴を生かす」ことや「地域の事例」を取り上げるとされている。学習にあたっては、「近代の日本の基盤が形成されたこと」、学習内容と「現代との結びつき」に気付かせることが必要であるとされている。つまり、近代社会へと至る大きな歴史の流れにおいて、近世に各地域で産まれた伝統産業（特産物生産）や伝統文化（生活文化）が、近代さらには現代の私たちとどのように結びついているかを学ぶのである。その際の具体的な留意点としては、地域の文化財、地域の発展に尽くした先人の業績を教材に、「博物館・郷土資料館などの地域施設の活用や地域の人々の協力」を得て学習展開を行うとされている。

ii 小学校の学習内容との継続性

平成29年の中学校学習指導要領解説社会編では、小中学校社会科における内容の枠組みと対象の整理がなされ、一覧表として明示された（参加資料2「小・中学校社会科における内容の枠組みと対象」）。

中学校歴史学習における地域教材活用の視点（Ⅱ）

これにより中学校社会の各分野の単元内容は、小学校社会の各学年で既習した内容と系統的に接続させ、小学校の内容を受けていかなる形で展開させていくべきか容易に把握することが可能となった。

この背景には、平成28年12月の中央教育審議会答申で示された指導上の問題と改善の提言が直接に影響している⁵⁾。中学校の教員は、指導している内容を、小学校の学習内容を踏まえて、中学校でいかに展開していくか、つまり扱う学習対象が小・中学校の全体においていかに位置づけられるかという意識のもとで指導にあたる必要がある。

中学校の歴史的分野で身近な地域を積極的に扱う小項目「(ウ) 産業の発達と町人文化」(中項目(3) 近世の日本)の内容は、小学校社会4年の「(4) 県内の伝統や文化、先人の働き」の学習内容と系統性を有するものである。この小学校の内容は、平成20年学習指導要領では、学校周辺の身近な地域や市町村の学習で扱われていたが、新学習指導要領では対象地域を空間的に広げて県を範囲として展開するように変更された。小学校の内容にある「県内の伝統や文化」とは、具体的には有形・無形の文化財や地域に残る年中行事が学習対象となる。また「先人の働き」とは、開発・教育・医療・文化・産業で地域の発展や技術の開発に業績を残した具体的な事例

を教材として学習を展開する(詳細は下表1参照)。

すでに拙稿第Ⅰ報において指摘したが、「先人の働き」の事例は、用水路開削や堤防建設の治水事業と耕地開発を内容とする、いわゆる「開発単元」として戦後の一貫して継承されてきた学習内容である。中学校社会における系統的な学習展開の視座については、第Ⅰ報で提示した。本稿では「産業」を事例として、なかでも近世に特産物生産として成立し、近代産業へと展開していく織物業を対象に、中学校歴史的分野の身近な地域の学習についての一視点を、具体的な授業構想を通して提示してみたい。

Ⅱ 日本の近世「産業の発達と町人文化」における特産物生産の教材的意義

中学校社会歴史的分野の大項目「日本の近世」で扱われる「産業の発達」とは、直接的には農林水産業およびその加工業(手工業)であり、広くその流通・販売に関係する商業・輸送業をも包括した全体像をとらえる学習である。ここにみられる加工業は、織物(絹・綿・麻織物とその染色)、漆器、陶磁器、醸造業等は、その地域の風土において産まれた特産品として、現在も伝統産業・伝統工芸として存続する。なかにはその技術も含め、有形・無形の文化財とされているものも多く存在する。

表1 小学校4年社会「県内の伝統文化と先人の働き」の目標・内容
(平成29年『学習指導要領解説社会編』より作成)

	県内の伝統文化	先人の働き
具体的事例	歴史的建造物や遺跡、民俗芸能などの文化財、地域の祭りなどの年中行事など	用水路開削、堤防改修、砂防ダム建設、農地開拓、藩校や私塾、医療技術の開発、病院設立、新聞社を興す、産業発展(農業・漁業・工業)への貢献
理解	県内の文化財や年中行事は、地域の人々が受け継いできたこと 県内の文化財や年中行事には地域の発展など人々の様々な願いが込められていること	先人が様々な苦心や努力により当時の生活の向上に貢献したこと
技能	博物館や資料館などを見学したり、昔と現在の地図や写真などの資料で調べたりして、年表などにまとめる	
思考・判断・表現	歴史的背景や現在に至る経過、保存や継承のための取組などに着目して、県内の文化財や年中行事の様子を捉え、人々の願いや努力を考え、表現する	当時の世の中の課題や人々の願いなどに着目して、地域の発展に尽くした先人の具体的事例を捉え、先人の働きを考え、表現する
態度	地域に対する誇りや持続可能な社会を担おうとする態度を養う	

表2に中学校社会の歴史教科書（採択数の多い上位3社）に取り上げられている近世の特産物を示した。教科書では全体史として近世の産業発達が扱われるため、表2の品目を列島地図に載せた分布図が教科書に掲載され、列島各地で特産物生産が成立した状況を生徒が視覚的に認識できるようになっている。

表2 中学校歴史教科書に取り上げる近世の特産物（採択数の多い上位3社）

蝦夷昆布・鮭・鮭	紀伊鯨
津軽漆器	阿波藍
南部鋳物	土佐鱈
最上紅花	土佐和紙
会津漆器	京西陣織
越後村上鮭	京清水焼
越後縮布	有田焼
結城紬	薩摩上布
桐生絹布	薩摩煙草
銚子醤油	久留米餅
野田醤油	奄美砂糖
上田紬	美濃和紙
輪島漆器	加賀九谷焼
越前和紙	尾張瀬戸焼
越中売菓	武蔵小川和紙
加賀友禅染	駿河茶
三河木綿	石州和紙
伊勢木綿	伊予木蠟
河内木綿	南部ひば
丹後ちりめん	木曾ひのき
丹波漆器	秋田すぎ
龍野醤油	熊野すぎ
灘酒	備後畳表
赤穂塩	日向飴肥すぎ

こうした特産物の分布図は、教科書の同じ単元内に掲載される近世の交通路（海上交通・陸上交通）を示した列島図と対照させることで、近世社会の時代的特徴を経済史的視点から学習する上で有効性を発揮する。

歴史的分野の学習目標は、学習指導要領に日本の歴史の「大きな流れ」の理解と明示され、日本の歴

史を関連する世界の歴史を背景にして「政治の展開、産業の発達、社会の様子、文化の特色など」において各時代の特色を明らかにした上で、歴史の時間的流れを大きくとらえることが求められている。加えて歴史学習の意義を考えたとき、現在を生きる私たちが過去の歴史的事象を読み解く中で、社会のあり方を考え、自身の生き方（為すべきこと）を見いだすことを根本に置いて学習指導を展開する必要がある。

近世の時代的特徴を経済史的視点から捉えた場合、拙稿第I報で指摘したように、人々が日常的に貨幣を用いて生活するスタイルが生まれて経済的価値観を膨らませ始め、現代へと連なる経済社会の成立が学習上の重要概念となる。こうした近代社会へと結びつく時代の特色を踏まえた上で、中学校歴史的分野の大項目「近世の日本」の「(ウ)産業の発達と町人文化」における学習指導を行う必要がある。

つまり、近世から近代への「大きな流れ」をとらえるとは、経済社会の成立と展開において、江戸時代がその後の時代、明治時代の近代国家形成にいかにつながっていくかとの視座を踏まえて単元構成をつくる必要がある。

現在、各地域にみられる伝統産業・伝統工芸は、江戸時代の特産物生産として出発したものが大部分である。これらの特産物は、市町村の自治体レベルで存在するため、地域教材として入手・活用が容易である。江戸時代における特産物生産の成立を、その地域の地理的環境（自然条件・社会条件）から位置づけ、その消費を流通・販売過程を含めて考究することで、個別地域が列島各地と結ばれる中で、結果的に列島空間（北は松前地方から南は奄美地方まで）を覆う経済圏（分業協業圏）が形成される認識を得ることが可能となる。

これは近代国家の空間形成が、江戸時代にいかに準備されたかという視点からの考察である。近代へとつながる国民経済の領域が、江戸時代の経済社会化のなかで形成されたとの認識を得ることにつながる。

つまり、江戸時代の産業の発達という事象を通して、庶民の生産・消費行動そのものが、列島を覆う

分業協業圏を生み出し、明治国家の国民経済の領域形成に至るといった社会認識を持つことが可能となる。江戸時代の特産物成立を、国民経済という概念からとらえ直した時、列島における近代の国民国家の形成基盤を、他律的なものでなく、生活者の主体的な営みとして相対化して認識することが可能となる。同時に、近世の特産物生産・流通の分業協業圏においては、蝦夷地と琉球が含まれていない点に注意しなければならない。明治時代以降の近代国家建設で、両地域が組み込まれていく過程、さらには両地域が現在、日本国のなかで置かれている立ち位置を考える上で重要なものとなってくる。いずれにせよ近世社会を、列島における経済社会の成立と展開という概念のもとで考察することで、江戸時代に各地域に成立する特産物を以下のような視座において教材化することが可能である。この学習展開では、特産物の生産・流通・消費を、地域間の双方向的な関係においてとらえ、列島全体（蝦夷・琉球を除く）を面とする分業協業圏（生活圏）の形成を検証する。その生活圏を、近代国家の経済的な領域形成（国民経済の形成）として位置づけ、生徒自身に自らを含めた生活者の視点から国家を相対化させてとらえる認識を養うことにつながるのである。

Ⅲ 中学校歴史学習「日本の近世」・産業の発達の授業展開～新潟県魚沼地方を事例にして～

事例地域として、第Ⅰ報でも取り上げた新潟県魚沼地方を設定する。この地域は、近世前期に大規模な新田開発が進展して米生産が始まるとともに、近世中後期には特産物として織物（越後縮）の主産地となり、現在でも重要無形文化財の伝統工芸品として存続している。現代でも最も高い銘柄米の産地であるとともに、地域住民が豪雪地帯の風土の育まれてきた伝統文化を主体的に受け継いでいこうとする姿勢が見られる地域でもある。

近世の織物業は、近代産業への展開していく前提として重要視され、中学校の歴史教科書でも問屋制家内工業や工場制手工業の成立・展開、紡糸（製糸）・織布・染色等をはじめとする工程の分化から分業協業の概念を検証する教材として取り上げられている。

中世に魚沼地方は京へ向けた青苧の一大産出地であったが、近世初期の新田開発で水稻が生業の中心となる。さらに狭隘な山間地であるがゆえに、米作が拡大に限界に達すると、東北地方から原料（青苧）を移入して、西国からの技術移転と織り出しの工程に特化した形で「越後縮」の特産物を成立させる。この成立過程を地理的分野の視点を活用し、当時の魚沼地方の自然条件・社会条件から新たに生み出された文化としてとらえることができる。

越後縮は大都市江戸の支配階層の高級夏着から始まり、近世後期には一般庶民の夏着として普及する。その売り上げによって魚沼地方に縮景気が起こり、反対に他地域から魚沼地方にもたらされる産物を購入して生活を営むことで、地域社会の貨幣経済化を農民の消費行動として主体的にとらえることが可能となる。江戸時代後期に起こる縮販売の低迷から地域内で階層間対立が発生し、地域社会の立て直し、再編へ向かうことをとらえさせる。まとめとして、各地域における特産物の成立で人とモノの双方向性により列島全体が生活圏となって一体化し、近代明治国家の領域の前提が形づくられた認識を獲得させる中で、近世から近代へといたる時代の大きな流れを考察させる授業展開を構築する。

中学校 社会科（歴史的分野）学習指導案（略案）

日時 平成〇〇年〇月〇日

場所 ××市立××中学校 2年〇組

- 1 小単元名：「産業や交通・流通の発達と町人の文化」
- 1 身分社会での暮らし
 - 2 諸産業や交通・流通の発達
 - ・新田開発
 - ・特産物の成立とその流通（本時・展開1）
 - 3 貨幣経済の広まり（本時・展開2）
 - 4 上方で栄えた町人の元禄文化

2 本時の目標

・伝統産業の越後縮を通して特産物の成立を自然的条件と社会的条件から理解する。（特産物の成立する歴史的経緯）
 ・特産物の流通過程を調べる中で、江戸を中心とした都市の需要から、江戸時代後期には列島各地の庶民（農民）の消費へと拡大していくことを理解し、生活物資の生産・流通において列島が一体化して一つの経済圏が形成されたことを考える。（列島を一体化する経済圏（国民経済）の形成）
 ・特産物の生産を担う農民の消費拡大（収入を上回る貨幣支出）が、地主・小作の対立、打ちこわし、他地域への出稼ぎ等の社会現象を引き起こし、江戸時代後期の村落協同体を変容・動揺させていったことを理解する。（貨幣経済による村落社会の変質）

3 本時の考察・内容（略）

4 評価規準（略）

5 本時（2時間）

(1) 本時の準備

- 教科書、地図帳 ○資料①～⑦ ○ワークシート ○スライド画像
 ○越後縮の製造工程を記録した動画（「日本きもの紀行・越後縮」）

(2) 本時の展開

段落	主な発問・働きかけ	予想される発言・思考	学習内容・留意点	資料
導入	<p>・前時の学習では、江戸時代初めの新田開発を通して、近世社会（江戸時代）の特徴について学びました。それは私たちの地域が現在、ブランド米「魚沼コシヒカリ」の産地となる出発点でもあります。</p> <p>○もう一つ私たちの地域には、江戸時代に生まれた特産品があります。それはこの草（苧麻を提示）を原料とするものですが、何だか分かりますか。</p> <p>・それはこの織物で「越後縮（小千谷縮・越後上布）」と呼ばれます。現在、伝統工芸品として重要文化財に指定されている織物です。どのように作られるか、5分間動画を見て下さい。後で生産工程について質問をします。</p>	<p>・前時のふり返り</p> <p>・苧麻の実物を見る（生徒は苧麻と織物を結びつけることができない場合に、縮布を提示する）</p> <p>・縮布の実物を見る ・縮布の製造工程を記録した動画を見る（5分間）。</p>	<p>前時のふり返り</p> <p>縮布原料が青苧であることを知る（知識・理解）</p> <p>苧績みから織布、雪さらしにより手工業で縮布が製造されることを知る（知識・理解）</p>	<p>動画「日本きもの紀行・越後上布」</p>

中学校歴史学習における地域教材活用の視点（Ⅱ）

学習課題 「なぜ魚沼地方に越後縮の特産物が生まれたのか。」			
<p>1 越後縮の成立</p> <p>・まず、配布した資料①年表とワークシートを使って、いつ越後縮の生産が始まって、どのような変遷をたどったのか調べてみて下さい。</p> <p>・魚沼地方は中世に青苧と麻布の産地、江戸時代初めに米の産地、江戸時代中期に縮布の産地と変遷をたどったことが分かります。</p> <p>○なぜ大規模な新田開発で米生産が中心となった魚沼地方で織物生産が興ったのでしょうか。</p> <p>○まずは、縮布生産が興った自然的条件について考えましょう。地図帳を開いて下さい。魚沼地方は地形的にどのような場所に位置していますか。その地形は越後平野部と比べ米生産にどのように影響しますか。</p> <p>○今見た動画で、織物を晒す工程がありました。その工程は何のために、どのような作業であったか。</p> <p>・自然的条件としては、狭隘な山間地で米生産だけでは生活できないこと、豪雪地で晒し工程に適していたこと、農閑期に室外作業ができず、女性の家内仕事として生産が発展したことがあげられます。</p> <p>○次に社会的条件について考えてみましょう。政治面について、魚沼地方は天領（幕府直轄地）でした。以前学習しましたが、武士（役人）と領地の関係で藩領と天領の違いは何ですか。</p> <p>○天領は平素、役人（武士）が常駐していないので、領内に目が行き届かない、領主の監視や規制がそれほど厳しくないといえます。これは、領内の農民が新しいことを始めようとする際にどう影響しますか。</p>	<p>・資料①年表（魚沼地方における麻織物の歴史）を参考に、ワークシート（越後縮の生産変遷）をまとめる。</p> <p>・板書【魚沼地方の産物】 中世…青苧と麻布→京都へ 近世前…米→大坂／江戸へ 近世後…縮布→江戸／全国へ</p> <p>・山脈・丘陵に挟まれた細長い盆地で、魚野川流域に米生産の可能な場所が限定される（米生産の場所が限定される）。</p> <p>・生地を漂白を行うため、雪上に織物を広げて日光にあてる。</p> <p>・板書【縮布の特産化】 ①自然的条件 狭い山間部（米生産の拡大限界） 豪雪地（晒し工程、冬季の農閑余業）</p> <p>・藩領では武士が城下で暮らし役人として領地を直接治める。天領は役人である武士が、必要な時（年貢納入など）に江戸から出張してくる。</p> <p>・領主の支配が直接及ばないので、農民たちへの規制がゆるく有利にはたらく。</p>	<p>・年表から必要事項を抽出してまとめる。（技能）</p> <p>・米単作地域に織物生産はなぜ生まれたのか疑問を持つ（興味関心）</p> <p>・地理的視点から縮布生産の発生を自然的条件と社会的条件に分けて考察する（思考）</p> <p>・地図の読み取り（技能）</p> <p>・雪と縮布生産の関係性を考える（思考）</p> <p>・特産化の自然的条件を知る（知識・理解）</p> <p>・幕藩制のしくみを理解しているか（知識・理解）</p> <p>・領主権の弱さが農民の行動規制を弱めたことに気付く。</p>	<p>資料①年表 ワークシート</p> <p>地図帳</p> <p>ワークシート</p>

展
開
1
（1時間目）

<p>○次に製造の過程や技術について考えてみましょう。先の動画を思い出しながら資料②で確認して下さい。縮布の原料は苧麻の茎皮をはいだ青苧を糸にしたものです(苧績み)。その糸を布へと織り上げます(座織り)。この作業の技術がどのように確立したか。まとめたワークシートから説明して下さい。</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・青苧はもともと中世から作っていた。 ・青苧の糸を用いた白布を中世から織っていたので技術があった。 ・江戸時代になって1660～70年頃に、播磨国から縮布の技術が明石次郎によって伝えられたとある。 	<ul style="list-style-type: none"> ・青苧・麻布の生産の伝統を基礎として、その上に新たな技術導入を行い、縮布という新しい品物を生み出したことを知る。(知識・理解) 	<p>ワークシート</p>
<ul style="list-style-type: none"> ・平織りの白布と縮布を提示する。 <p>○同じ青苧から造られた織物です。中世の白布と近世の縮布は異なる織物です。2つの生地はどのように違いますか</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・縮布には表面に凹凸のしぼがある。 	<ul style="list-style-type: none"> ・実物観察から白布と縮布の違いをとらえる 	<p>ワークシート</p>
<p>○江戸時代に縮布を織出す農家は、青苧をどこから手に入れましたか。なぜ自分たちで作りませんでした。どのようにして手に入れましたか。</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・青苧を東北の米沢・最上・会津地方から仕入れた。 ・耕作は水稲作が中心で、青苧を作らなくなった。 ・商人から購入した。 	<ul style="list-style-type: none"> ・原料生産と織布製造の工程が分離したこと(分業)を知る(知識・理解) 	<p>ワークシート</p>
<ul style="list-style-type: none"> ・越後縮の生産は、原料を他地域から移入し、加工工程のみを特化させた点に特徴が見られます。これは列島社会の中で、原料生産と加工工程を別々の地域に分離する分業形態ができあがったことを意味します。 	<ul style="list-style-type: none"> ・江戸で幕府・大名が買い、さらに一般武士が式服として用いた。 	<p>ワークシート</p>	<p>ワークシート</p>
<p>○1700年代に大量に生産が始まった縮布は、どこで誰に販売されたのか。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・縮布のしぼのある生地は汗をかいても肌さわりが良く、初め江戸において武士階層の夏の高級衣料としてもはやされました。江戸時代後期には庶民にも広まりました。 	<ul style="list-style-type: none"> ・陸路で人馬によって運ばれた。 ・輸送の距離が短く、時間がかからない。 ・魚沼地方には江戸に直結する三国街道(現在の国道17号線)が通り、越後の中で江戸に最も近かった 	<ul style="list-style-type: none"> ・既習している海の道・陸の道(江戸時代の交通)と関連させて考察する。(思考) 	<p>ワークシート</p>
<p>○前場で学習したように、魚沼地方で生産された米は、魚野川・信濃川を下されて、新潟港から西廻り航路で大坂へ、さらにそこから船で江戸へと搬送されました。米に比べて重量が軽く、高価な縮布はどのようにして消費地江戸に運ばれたか、地図帳をみて考えて下さい。</p>	<p>ワークシート</p>	<p>ワークシート</p>	<p>ワークシート</p>

<p>○魚沼地方にとって、新潟から西廻りの大坂経由で搬送するより、陸路を用いる利点は何ですか。</p> <p style="text-align: center; border: 1px solid black; padding: 2px;">2 縮布生産を担う女性</p> <p>○先に見た動画を思い出し、資料②を参考して、縮布は誰がどのような場所・時間に生産していたのか。</p> <p>○各農家で女性たちが家事や農作業の合間に織っていました。現在のように工場で機械によって生産される織物と比べた時、生産量・品質はどうでしたか。</p> <p>・各農家で女性が数反ずつ織った縮布は、集荷商人（買宿）が買い集めて、縮市や直接に江戸の呉服問屋に送られました。</p> <p>・買い付けの様子は、教科書の資料にあります。農家は集荷商人から原料や道具などを借りて、織り上がった商品代金で借り賃を精算しました。江戸時代中期にはこのような形態の「問屋制家内工業」といわれる仕組みができました。</p> <p>・質の良いものは、1反が金1両以上の値段で取引されたといわれます。農家にとっては重要な貨幣収入であり、それを担っていたのが母や娘など家内の女性でした。</p> <p>[小括] ・狭隘な山間部の豪雪地域である魚沼地方で生活する農民が、米作に加えて織物特産物を産み出した歴史経緯を明らかにしました。</p> <p>○魚沼地方の縮布生産は、1700年代後半の最盛期には20～30万反に及んだとされます。1反金1両と単純計算するとどれくらいのお金が魚沼地方にもたらされましたか。</p>	<p>・板書【縮布の特産化】 ②社会的条件 天領で規制が厳しくない。 中世からの伝統。 新技術の導入（しほのある生地）。 加工工程に特化した（他地域から原料移入）。 陸路で江戸に直結。</p> <p>・農民の各家々で、積雪で野外仕事のできない冬季に、女性が農閑期の夜なべ仕事として糸つくり・織る作業を行っていた。</p> <p>・生産量は手仕事なのでたくさん作れない。 ・品質は織る人それぞれの技能によって異なり、機械生産のように均一でない。</p> <p>・各農家で婦女子によって少量ずつ生産されていたものが、組織化され問屋制家内工業へと展開する。</p> <p>・金20～30万両、すごい金額だ。</p>	<p>・特産化の社会的条件を知る（知識・理解）</p> <p>・織物生産は各農家で女性の手仕事として営まれたことを知る</p> <p>・問屋制家内工業の仕組みがどのようなものか『河内名所図会』から読み取る。（技能）</p> <p>・農家にとって縮布が重要な貨幣収入となっていたことを知る（知識・理解）。</p> <p>・縮布の特産化による多額の貨幣流入により、魚沼地方で景気が良くなることを予想する。</p>	<p>資料② 女性の縮布生産の工程（画像）</p> <p>・スライド（教科書の『河内名所図会』の挿絵「織物の生産と買い付け」）</p>
---	--	--	---

・縮の生産・販売による多額の収入が、私たちの地域社会にどのような影響を及ぼしたか、さらに江戸時代に各地に生まれた特産物が列島社会全体にどのような意味を持っていたのか、今回の授業で考えたいと思います。	・縮布の特産化で多額の金銭収入が地域にもたらされるなかで、農民たちの生活がどのように変化したか。	・縮布の特産化で起こった縮景気の影響で、農民たちの生活がどのように変化したか疑問を持つ（興味・関心）
---	--	--

【2時間目】

導入	○この人が誰か分かりますか。小学校でも地域の発展に尽くした先人として学んだはずですか。	・鈴木牧之です。	・鈴木牧之像の画像から小学校の「先人の働き」で学習した内容を振り返る。	スライド（鈴木牧之像）
	○いつの時代の人で、何をやった人ですか。	・江戸時代に『北越雪譜』を著して、魚沼地方の生活風習を広く紹介した。		

学習課題 「特産物の成立は庶民生活や列島社会にどのような影響をあたえたのか。」

展開 2 (2時間目)	<p>3 貨幣経済の高まり</p> <p>○牧之の家は、縮商いと質屋（金融業）を営んでいました。牧之の生きていた時代に、魚沼地方の縮生産はどのような状況でしたか。</p> <p>・牧之は縮生産量がピークに達して下降していく、そんな時代に地域の運営を担うリーダーとして活動していました。</p> <p>・牧之は晩年になって次のような言葉をエッセーの中で述べています（資料③）。</p> <p>○資料③の言葉を手がかりに、当時の農民たちが何にお金を使っていたか見ていきましょう。同じ魚沼の地域リーダー（庄屋）で太刀川喜右衛門という人が1800年始めの農民の生活の様子を記録していました。資料④になります。月別に記事を抜粋しているので、班に分かれて、何にお金を使っているか調べてください。（2月・3月・5月・6月・7月・8月・10月・11月の班）</p> <p>・（生徒の報告から）農民たちが、おしゃれな着物を身につけ、旬の食べ物を買って食べて豊かな衣食の生活をするようになった。また賭け事ゲームなど娯楽にもお金を支出している様子がわかりました。</p>	<p>・牧之が若い頃、縮生産が最盛期にあり、晩年には生産が落ち込んでいった。</p> <p>（鈴木牧之の生年：1770～1842）</p> <p>・『夜職草』の一節を読む 「私が思うに、今の魚沼の人たちは、例えば金10両の収入しかないのに、13、14両それ以上のお金を使っている。これによって年々借財が膨らんでいって生活苦に陥っている」</p> <p>【調べた内容を報告】</p> <p>・2月（外谷からのあさつき・独活、薪木など燃料、風呂屋、髪結）</p> <p>・3月（江戸から来る練馬大根など多種類の野菜種。鯛・鯛売りなどを旬の魚を買って食べる。ゼンマイ・ワラビなど山菜売りから買って食べる）</p> <p>・5月（大島からの早生のナス・瓜・にんにく）</p> <p>・6・7月（昔はみんな麻を栽培して、自分で織って着ていたが、今は真岡木綿のおしゃれな染めものを買って着る）</p> <p>・8月（きのこを買って食べる）</p> <p>・10月（甲州芋、さつまいも、自然薯を他所から商人から買って食べる）</p> <p>・11月（年中行事の時に賭け事やゲームが盛んにおこなれている）</p>	<p>・資料から当時の農民の生活苦の背景を把握する（技能）。</p> <p>・資料から当時の農民の衣食にかかわる消費生活の実態をまとめ報告する（技能・表現）。</p>	<p>前時配布の資料①の年表を活用</p> <p>資料③ 鈴木牧之『夜職草』現代語訳</p> <p>資料④ 太刀川喜右衛門『やせかまど』の現代語訳</p>
-------------------	--	--	---	---

中学校歴史学習における地域教材活用の視点（Ⅱ）

<p>○牧之の言葉「借財が膨らんでいって生活苦」の原因は何ですか。</p> <p>・江戸を始め列島各地で魚沼地方の縮布が売れて景気がよくなり、農民の生活が贅沢になった。ところが1820年頃になると、同じような青苧の織物の生産地が魚沼地方以外の各地に現れました。</p> <p>・原料生産地であった米沢地方では藩が中心になって組織的な生産を推進しました。そのような組織体制が工場制手工業というものです（教科書『尾張名所図会』挿絵をスライド提示）。</p> <p>○前回授業で学習した問屋制家内工業との違いは何ですか。</p> <p>○魚沼地方の縮生産と比べ、工場制手工業の利点は何ですか。</p> <p>・原料（青苧）を生産していた米沢藩など、各地の藩が藩営工場を建て特産物の組織的な生産を進めました。</p> <p>○これにより、各農家で少量ずつ生産している魚沼地方の縮布生産はどのような影響を受けたのか、なぜ生産が減っていったのか説明してください。</p> <p>・この結果、地域社会がどのような状況になったか、資料⑤の牧之の言葉から見ていきましょう。</p> <p>○魚沼地方の農民が「借財を抱えた」のはなぜですか、資料③も参考して、説明してください。</p> <p>・牧之の家は、そのような農民たちに農地や家財を担保にお金を貸す商人でもありました。</p>	<p>・各農家で生活に使うお金の支出が増え、収入を上回って借金をしたため。</p> <p>・『尾張名所図会』挿絵からマニュアルファクチュアの形態を読み取る。 ・工場に大勢の女性が集まって一斉に織物を作っている。 ・1人が全部作るのではなく作業工程を細分化して分担している（分業）。</p> <p>・自分の家でなく、女性が工場に行って糸づくりや機織りをしている。 ・糸をつくる人、織る人、仕立てる人などそれぞれの分担が決まっている。 ・一人が糸づくり、織布、染色などをすべてやらずに、専門の担当分野のみを担当し、効率よく流れ作業とすることで大量生産が可能である。 同じ糸、同じ道具、同じ染料を使うので、均一な品質で製品ができる。 ・組織的に生産を始めた地域から、大量に均質な織物が出回るようになったため、魚沼地方の縮布売り上げが落ち込んでいった。 ・新たな生産地域に対抗できなくなった。 ・資料⑤を読む 「借財を抱えて困窮すれば、自分たちの生活は顧みず、富裕者たちに恨み妬みを述べる。ついには借金を返済しないものや、領主への年貢を納めない者が多数あらわれた」</p> <p>・魚沼地方の縮布が売れなくなり、農民たちが収入を減らしたが、生活水準を下げることができず、支出が収入を上回り借金を増やしていった。</p>	<p>・問屋制家内工業と工場制手工業の違いを知る（知識・理解）</p> <p>・新興の生産地との間で産地間競争が起こり、魚沼地方の縮布生産が不振となる過程を知る（知識・理解）</p> <p>・経済的困窮の一端が、家計収入と支出のアンバランスにより発生したことを考える（思考・判断）</p>	<p>スライド（教科書『尾張名所図会』挿絵）</p> <p>資料⑤ 鈴木牧之『夜職草』現代語訳</p>
---	---	--	---

	<p>○こうして困窮した農民たちが集団で、お金やお米を持っている富裕者（商人地主）の家へ押しかける事件が起きました（スライド提示）。一般的に何といわれる騒動ですか。</p> <p>・地域の中で、富裕な商人地主と一般農民の間でお金の貸し借りをめぐる対立が起きました。この後、牧之のような地域リーダーは混乱をした地域の秩序を立て直しに尽力することになります。</p>	<p>・「一揆」「打ちこわし」</p> <p>・お金の貸し借りは契約関係、地域リーダーの商人地主は困っている農民を支える恩情関係、両関係の間で揺れ動く地域社会（協同体）の姿をとらえる。</p>	<p>・打ちこわし、一揆の背景をたんに幕府・藩への反体制と一面化するのではなく、農民自身の消費拡大から生じた生活困窮、金貸しの富裕者との間の信頼関係の崩壊という側面にも気付かせる。</p>	<p>スライド（教科書の『幕末江戸市中騒動図』うちこわし挿絵）</p>
<p style="writing-mode: vertical-rl;">まとめ</p>	<p style="border: 1px solid black; padding: 2px;">4 特産物の成立と列島の一体化</p> <p>○資料⑥「諸国特産物番付」を見てください。私たちの地域の越後縮も東方8番目で上位にランクインしています。この番付を一覧してどのような印象を受けましたか。</p> <p>・江戸時代後期にこうした特産物の番付が成立する意味を考えてみましょう。</p> <p>○例えば和歌山県特産の果物は何ですか。</p> <p>・番付表にも紀伊みかんがランクインしています。皆さんが和歌山のみかんを普段食べているから、それがわかります。つまり、特産物となるためには、その地域内で消費されるのではなく、列島各地へ和歌山みかんが流通して、人々が普通に手にすることができてはじめて「和歌山みかん」という認識が生まれます。</p> <p>○資料⑦の2つの列島図を見てください。2つの図を重ね合わせ特産物が成立する過程をワークシートに説明してください。</p> <p>・魚沼地方でも縮布を列島各地へ売り出す一方で、各地から様々な産物が入ってきて、それを購入して農民たちが生活するようになります。</p>	<p>・日本全国にとってもたくさんの特産物があった。</p> <p>・江戸時代に今でもそれぞれの地域の産物とされている品物が生まれた。etc</p> <p>・みかん</p> <p>・ワークシートに説明を記入「各地域の産物が、海の道・陸の道で列島各地に運ばれ、特産品として知られるようになる。」</p>	<p>・江戸次第後期に列島各地で多様な特産物が成立していることを認識する（興味・関心）</p> <p>・その地域の産物が各地へ流通し、人々が手にする状況が存在することが特産物とされる背景であることを知る（知識・理解）</p> <p>・自分たちの地域からだけでなく列島各地からもモノが流入してくることに気付く（興味・関心）</p>	<p>資料⑥諸国特産物番付（天保11年）</p> <p>資料⑦特産物分布図・江戸時代の交通ワークシート</p>

中学校歴史学習における地域教材活用の視点（Ⅱ）

<p>・江戸時代後期になると、各地でモノや人の双方向の交流が盛んになり、列島全体が一つの生活圈となっていたことがわかります。</p> <p>○皆さんは「あなたの国はどこですか」と問われた時に何と答えますか。一方で、江戸時代に魚沼地方で生活していた人たちに「あなたのお国はどこですか」と問われたら何と答えたでしょう。</p> <p>○そうです。今のように列島に暮らす人が、「私は日本国民（日本人）である」との意識を一般的に持つようになるのは、いつの時代からですか。</p> <p>・明治時代に近代国家の建設が始まり、列島に暮らす人が日本国民との意識を持つようになります。それは明治時代に一気に作られたのではなく、前段階として江戸時代後期に列島が一つの生活圈とする潜在的な意識が、列島に生活する人たちの間で出来ていたといえます。</p> <p>・ただ、資料⑦の図をもう一度よく見てください。現在の日本の範囲から外れている地域があります。どこですか。</p> <p>・そうです。ここでは蝦夷地と琉球が列島の生活圈から外れています（生活圈に含まれていない）。明治時代になってこれら2つの地域がどのようにして日本国の領域に編入されるかは、明治時代を学習する際に考えることにします。</p> <p>【まとめ】江戸時代に経済社会（お金を使う経済）が進展するなかで、列島が一体化し、一つの生活圈が形成された。</p> <p>・諸産業や商業の発達するなかで庶民が担い手となった近世の文化について学習します。</p>	<p>・日本です。 ・越後国です。</p> <p>・明治時代からです。</p> <p>・明治時代以前に、人びとの生活レベルで列島の一体化した領域が形成されていたことに気付く。</p> <p>・北海道と沖縄です。</p> <p>・現在の日本にあって北海道や沖縄がどのような課題を抱えているかに気付き、それを両地域がたどってきた歴史と関連させることに関心を持つ。</p> <p>・ワークシートにまとめを記入する</p>	<p>・人とモノの双方向の交流による列島の一体化について考える（思考・判断）</p> <p>・近代国家の領域形成の前段階として、近世後期に列島の一体化がモノや人の双方向の交流から出来上がっていたことを知る（知識・理解）。</p> <p>・明治期の近代国家建設において、琉球処分や北海道開拓により、両地域が国家領域に強権的に編入されて行く過程を学習する布石とする。</p> <p>・今回は江戸時代に庶民が担い手となって作り出した文化史学習の予告</p>	<p>資料⑦</p> <p>ワークシート</p>
--	---	---	--------------------------

[授業で使用する資料類（紙面の都合上省略した）]

- ・動画「日本きもの紀行・越後上布」（5分間）
- ・スライド画像、「『河内名所図会』織物生産の図（問屋制家内工業）」、「鈴木牧之像」「『尾張名所図会』織屋の図（工場制手工業）」、「『幕末江戸市中騒動図』うちこわしの様子」
- ・資料①年表（越後魚沼地方における麻織物の歴史）、資料②「女性の縮布生産の工程」、資料③⑤鈴木牧之『夜職草』現代語訳、資料④太刀川喜右衛門『やせかまと』現代語訳、資料⑥「諸国特産物番付」（天保11年）、資料⑦教科書「特産物分布図」「江戸時代の交通」

おわりに

本稿では、中学校歴史的分野の身近な地域の歴史学習について、小学校社会の内容「県内の伝統や文化、先人の働き」との系統性から、「日本の近世」の「産業交通の発達」の内容を取り上げて具体的な授業展開の事例を提示する中で、その視点や意義を究明した。

第Ⅰ報では、現在の景観形成（都市と郊外の田園）の原点として近世の新田開発を取り上げ、小学校での開発単元における共感的理解の授業展開の問題点を指摘しつつ、経済社会の形成を背景として大開発が進展する社会構造を、多面的・多角的視点から考察する授業展開の事例を提示した。第Ⅱ報では、地域に残る伝統産業（近世の特産物）を通して、人やモノの双方向の移動が列島全体を面となって展開する生活圏形成を、近代国家（国民国家）へと連なる領域形成の前提としてとらえる学習展開の事例を提示した。

この二つの論稿では、私たち自身の生活・生活の営みから国家を相対化する眼を生徒に育成ことを目的とした。小中高校の社会科・日本史の教科書は「我が国の歴史」学習として内容が編まれている。そこでは「我が国（日本）」が前提となり、政治権力側の視点から制度や文化をとらえる歴史として記述されている。そのため、例えば小学校社会の「開発単元」について、森本正巳の指摘するように、その時々々の国の国土開発政策が学習指導要領に反映され、それが教員の教材解釈や学習指導に影響（規制）を及ぼすものとなっている。

身近な地域の歴史は、私たち自身の生活の場から、個別具体的な事象をもって社会のありようをとらえる教材として有効性を発揮する。しかし、全体（中央）に対する地域（地方）として対峙させる認識のもとでは、結局は「我が国の歴史」の枠組み構造に包摂されることになる。二項対立として対峙させるのではなく、私たち自身の生活の場から教科書の歴史記述を読み直すこと、これは「我が国（日本）」を前提するのではなく、私たちの生活の営みから国家そのものを相対化して捉える視点を持つことになる。こうした視点の育成が現在の歴史学習に求められるのである。そのための一試論が本研究で提示し

た授業展開の事例である。具体的には、日本の近世の特徴を、経済社会の形成という概念においてとらえ、多様な地域性をもった列島社会における双方向の交流を追究するなかで、近代国家の形成を相対化してとらえる視座を養うことを目的とした。身近な地域の歴史を縦糸に、他地域との結びつきを横糸にして織りなす織物として歴史を考察させる学習方法が確立されれば、中学校・高校の歴史学習が知識の獲得を主眼とするものから抜けだすことも可能である。同時に、これは「国際社会で主体的に生きる」こと、つまり現在の近代国民国家という枠組みが抱える課題の克服を考える視座にもつながると考える。

【註】

- 1) 六本木健志「中学校歴史学習における地域教材活用の視点（Ⅰ）～小学校地域学習「開発単元」との連携を踏まえて～」、『文教大学教育学部紀要』第50集，2016年12月，45-61頁
- 2) 森本正巳『「開発単元」の変遷・第2報』『名古屋女子大学紀要（人・社）』37号，1991年，49-57頁
- 3) 『中学校学習指導要領解説社会編』，2017年7月，93頁
- 4) 身近な地域の歴史を近世の日本「産業の発達と町人文化」の単元で積極的に学習展開する点は、平成20年版学習指導要領解説においても同様である。旧学習指導要領上における身近な地域の歴史学習の位置づけは、第Ⅰ報で詳述した。
- 5) 「幼稚園・小学校・中学校・高等学校及び特別支援学校の学習指導要領の改善及び必要な方策等について」，中央教育審議会，2016年12月

【参考文献】

- ・『越後縮布史の研究』児玉彰三郎，1971年，東京大学出版会
- ・『近世の専売制度』吉永昭，吉川弘文館，1996年8月
- ・『流通列島の誕生』林玲子・大石慎三郎，講談社現代新書，1995年11月

中学校歴史学習における地域教材活用の視点（Ⅱ）

- ・『近世の市場構造と流通』林玲子，吉川弘文館，2000年11月
- ・『国民経済－その歴史的考察』大塚久雄，岩波書店，1980年2月
- ・『北越雪譜』鈴木牧之，岩波文庫，1978年1月
- ・『夜職草・秋山紀行』鈴木牧之，平凡社東洋文庫，1971年1月
- ・『やせかまど』太刀川喜右衛門，『日本農書全集』36所収，農山漁村文化協会，1994年6月
- ・『聞き書き・雪のしじまに絹織る箴音』新潟県十日町市，1994年12月

